弔辞

瀧川博司
（学部6回）

謹んで、故寺本滉君の御霊前にお別れの言葉を捧げます。病と闘いながら、しかし寺ちゃんのことだから、きっと直ってみせるだろうと固く信じておりましただけに、こんなに突然にお別れをしなければならないとは夢にも思っておりませんでした。今なお、驚きと悲しみで一杯です。

寺ちゃんと私の出会いの始まりは私が神戸青年会議所の理事長を務めたときに、今は亡きみっちゃんこと島田光夫君と二人で副理事長として私を支えてくれたのが始まりです。以来三人は何をするのも一緒、何処へいくのも一緒、まわりから三人組とか三個一とか言われながら、長いつきあいをさせていただきました。

また、後年私が神戸商科大学の同窓会である淡水会会長をダイエーの中内さんから引き継いだときも、同期の加古隆一君とともに副会長として私をしっかりと後ろから支えてくれました。時にはその後ろから弾が飛んできたこともありましたが、それも私にとっては何故か心地良いものでありました。

君の卓越した企画力、行動力、実行力は万人の認めるところでありました。同窓会、さまざまな行事、事業を行う際にしっかりと落とし処を探り、それに至る道筋をきっちりと構築し、持ち前の説得力で、結論に

導いてくれたその見事な手腕は誰にも真似のできないものでありました。

私はそういった時には、一切君の意見に反論をしたり、君と議論を闘わしたりということはありませんでした。議論をしたところで所詮、勝負は決まっておるということもありましたけれども、寺ちゃんに任せておけば、一切全てうまくいくとそう固く信じこんでいたというか、信じこまされていたからです。

決して議論をしたからではありませんが、こんなやりとりをしたことを思い出します。

みっちゃんこと島田君が亡くなった後、三個一が二個一になった時、次は誰の番かなという話になった時です。君は私に対して、「それはあなたの方が年上だし、みっちゃんとは小学校からのつきあいだから、それはあなたやで」といわれました。それに対して私は、「そうかもしれないけれども、酒の飲めない私が先に逝ったんでは、みっちゃんの相手はできない。とにかく酒を愛し、ワインにも造詣が深い寺ちゃん、あんたやで。」といいました。そんな冗談話が今では冗談ではなくなってしまったことが残念でなりません。

君はまた大変多彩な趣味の持ち主でありました。ゴルフのように共通のものがありましたけれども、そのほかのほとんどは全く私とは無縁なものばかりでした。その中のひとつにスキューバダイビングがありました。「また潜りに行くのか」とよくそういったものです。全くの門外漢である私に、君はスキューバダイビングの楽しさ、面白さ、奥の深さを熱っぽく語ってくれました。その時の君の表情、眼の輝きは少年のようでした。君の別の一面を垣間見た思いが今いたしております。

君は数年前から事業をご子息の督さんに譲り、引き受けてきたいくつかの公職も全て退いてしまいました。

いかにも寺ちゃんらしい身の処し方でありましたけれども、これでもうやり残したことは何もないということではなかったと思います。それは君の人生設計の集大成ともいうべき、残った時間、残された時間を精一杯謳歌しようとしたその思いは、残念ながら道半ばで終わってしまいました。心残りもあったと心からお察しをしております。

私自身も、君と共にそれを共有できなくなってしまったことを本当に残念に思っています。

弔辞のつもりが、なぜか思い出話で取り留めのない話になってしまいましたが、君から「あんたそれが弔辞ですかいな」と叱られそうな気がしますけれども、湿っぽいことが大嫌いであった寺ちゃんに、どう語り

かけるのがいいか、私なり一所懸命考えながら、喋っていますので、どうか勘弁してください。

いよいよお別れです。いろんな思い出が駆け巡っています。

寺ちゃん、君は今、何をしているのですか。リアクション、速さが抜群の君のことです。もう早々と、みっちゃんと酒を酌み交わしているのですか、そんな姿が目に浮かんでまいります。

私もいずれそちらへ参ります。またその時には三個一パート2で大いにやりましょう。待っていてください。

名残はつきませんが、改めて、いささかもぶれることなく突っ走った君の見事な人生に拍手を送りながら、また私に対する長年のご厚誼に感謝をしつつ、お別れの言葉といたします。どうか安らかにお眠りください。

寺ちゃん。ありがとう。さようなら。

平成22年11月2日

友人代表　瀧川　博司

※この文章は御葬儀にて瀧川前会長の弔辞からテープ起こししたものです。㈱淡路屋様のご了解をいただき掲載させていただきました。